優秀賞

「うちの牧場、寄ってきんさい！見にきんさい！」

新潟大学
農学部農業生産科学科　4年　青沼 光

私は大学卒業後、長野県の中沢牧場へ後継者として就職します。いずれ、その中沢牧場の経営者となる私は、牛乳を生産することに加え、ヒトにもウシにも環境にも無理のない魅力的な酪農を、ファームインという形で牧場を訪れる人に伝える。そんな酪農経営を目指しています。

「酪農家になる」と夢を掲げたのは私が中学校2年生の時でした。私は、広島市内の住宅団地で、両親共働きという農業とは縁遠い環境で育ちました。中学2年生の冬。高校進学を控えた私には、はっきりとした夢がなく、将来に漠然と不安を感じていました。その時偶然、テレビでウシの放牧風景を見て、“自然の中でウシを追う”そんな生活に強烈に憧れました。この事をきっかけに、私は農業高校畜産科への進学を選択して本格的に酪農の勉強を始めました。

高校入学後、私は酪農の本質を知るとともに、厳しい現状を知りました。私は幼い頃からウシに触れたことがありませんでした。そのため、テレビで見た放牧風景を頭に描いて、酪農は自然と共存しながら、ただウシを飼って生活する遊牧民のようなものだと思い込んでいました。しかし、高校の実習で実際にウシの世話をしてみると、そのイメージはあっという間に崩れました。ウシがどこでも当然のようにする糞尿、自分の思い通りに動いてくれないことに感じるストレス、さらに、慣れない作業による極度の肉体疲労。私は高校入学後半年も経たないうちに、酪農家になるという夢に挫折しました。

それでも高校生活を続け、多くの実習を行ううちに、あれほど気になっていた糞尿にも慣れていきました。さらに、作業のコツをつかむと同時に体力も付いて「辛い」としか思えなかった作業を、当たり前にこなせるようになりました。そして、勉強をしていく中で、酪農の後継者不足やBSE問題で明るみになった生産者と消費者の遠い距離間を知り、何とかしたいと思うようになりました。

高校での様々な経験と深まる知識から、酪農とは、人がウシや自然とうまく調和して計画的に牛乳を生産するという、とてもスケールの大きい産業だということがわかりました。そして、酪農に対する経営者の考え方は十人十色で、酪農のスタイルも人それぞれであることに、とても魅力を感じました。私が描く、叶えたい酪農は、最初のカタチから次々に変化していきました。ちょっとしたきっかけから酪農に興味を持ち、農業高校に進学していなければ知ることのなかった酪農の持つ魅力を、もっと多くの人に知って欲しい。そのためには、私が酪農家となり、より多くの人が酪農に触れることの出来る牧場を作ろうと考えました。

高校卒業後は、酪農家として視野を広げようと大学へ進学しました。大学では畜産を取り巻く多くの事柄を学び、たくさんの酪農に興味を持つ人と出会いました。そして広い

視野で再度酪農を見つめると、様々な事が見えてきました。その中でも、私のように、酪農に興味を持つ人は案外多くいるものの、実際に行動に移す人は少ないということを知りました。酪農に興味があるが、酪農を知るために実際に行動に移せないのは、インターンシップよりも気軽で、観光牧場よりも酪農の現場に近づける、そんな牧場が都市部近郊にほとんどないためだと思いました。この時私は「酪農に興味のある人が気軽に酪農に近づける牧場がもっとあればいいのに」と思いました。しかし、酪農家の生活は日々変化し、予想外の事も当たり前に起こります。訪れた人につきっきりで何かを伝えるのが難しい、酪農家の現状を考えると、牛乳を生産しながら一般の人に酪農の魅力を伝えるには、ファームインというスタイルが酪農を感じ取ってもらうのに最適だと考えるようになりました。

自分のやりたい酪農が見えてきた大学3年の春から、酪農家になるための活動を始めました。後継者を探している一つでも多くの酪農家へインターンシップに行き、それぞれの牧場のおかれている環境や経営者の考え方、ウシの状態などを見て、その中から一つの牧場を選んで、就職しようと考えていました。しかし、連絡をしても応答を得られない場合が多く、連絡が取れても、牧場が忙しくて受け入れてもらえないといったすれ違いばかりで思うようにはいきませんでした。もどかしい時間が過ぎていきましたが、8月についにある酪農家で1週間の短いインターンシップをすることができました。これが私と中沢牧場の出会いです。

森に囲まれ、空気の澄んだ自然の豊かな中沢牧場を訪れて最初に感じた事は、ウシの穏やかさです。そして、オーナーであるHさんとの、ヒトとウシに加えて自然へのストレスを極力減らす酪農経営をするという考え方に共感しました。加えて、牛舎を自分で作り、機械類もほとんど自力で直してしまうその技術力に憧れました。さらに、牧場で働く人たちが楽しそうに中沢牧場について話してくれる様子や、つい深呼吸をしたくなる豊かな自然、そして食卓に並ぶ搾りたての牛乳の美味しさから、一気に中沢牧場の虜になりました。インターンシップも3日目を終えたとき、Hさんから「大学卒業後に後継者として牧場に来てくれないか？」という話がありました。私は独立できるのはもっと先のことだと思っていたので、とても驚き、そして嬉しく思いました。あっという間に魅了されたこの牧場の後継者になれるなら「お願いします」とすぐにでも返事をしたいと思いました。しかし、大学卒業までにまだ1年以上も時間があるので、もっと多くの牧場を見た方がより良い選択ができるのではないかとも考えました。こうした葛藤を抱えながら、中沢牧場での残り少ないインターンシップを過ごし、最終日に、後継者としての話へ返事をしました。「中沢牧場の後継者をやらせてください！」。この短い期間で将来に関わる選択に答えを出せた事に自分自身、一番驚きました。この選択ができたのは、普段からやりたい酪農を考え続けて頭の中で形にしていたことに加えて、その夢をHさんに伝えたら理解してもらえたからです。私はHさんの持つ多彩な技術と信念を引き継ぎ、都市部からのアクセスが難しくない中沢牧場の立地を

活かして、私の目指す酪農を実現させることができると感じました。そして、この時点で酪農を経営する環境が決まることは、目的意識や方向性が一層明確になり、その後の大学生活をより充実したものにできると思いました。

「サラリーマンとして働きたくない」という消極的な気持ちから始まった「酪農家になる」という私の夢は、今では通過点になり、広島から遠く離れた長野という、想像もしなかった土地で手の届くところに来ています。酪農に触れる機会のない環境で育った私だからわかる、気軽に酪農に触れることの出来る牧場の必要性。私は中沢牧場で、酪農に興味を持った人がいつでも気軽に訪れることが出来て、酪農に触れることの出来る環境を提供していきたいと考えています。ヒトが笑っていて、ウシも穏やか、さらに自然との調和の取れた酪農経営は、それだけで人を引き込む魅力を持っています。そんな魅力的な酪農を多くの人に感じてもらいたい。そして、その体験を通じて、私のように酪農家を目指す人や、酪農に携わりたいと考える人を増やしたい。私の行う取り組みをきっかけに個性的な酪農生活をする仲間が増え、この事が、酪農という産業の活性化に繋がることを願っています。